共立女子大學
文藝學部報

文芸学部報 第一二六号
編集責任者 池上公平
二〇一七年四月一日
共立女子大学 文芸学部発行
東京都千代田区
一ツ橋二-二-一

学部報に関する
ご意見・ご感想を
お寄せ下さい。

gakubuho@
kyoritsu-wu.ac.jp

この記事は共立女子大学のホームページからでもご覧頂けます

私の共立人生

坂口　麗衣

共立女子大学に勤めて四十八年、約半世紀もの長い年月を過ごしてきたことが夢のようである。昭和四十五年四月から文芸学部での生活が始まったことが、私の生涯の歴史にもなっている。現在の三号館が、文芸校舎と呼ばれていた頃、七階に体育室と体育研究室があり、主に七階を中心に活動をしていた。

その頃の文芸の助手の人達は、共立女子大学の卒業生が圧倒的に多かったが、体育に関しては共立に体育学部がないので、当然外部からの採用ということであった。

共立に採用になった年には、文芸学部に体育の助手が居なかったので、半沢敏郎先生の助手として配属された。三号館の建物は文芸学部と短大文科が授業を行うために使用していた。

文芸学部の研究室は二階・三階に集中していたので、七階から伝票の提出等、その他、用足しに出向いて行ったものである。

モスクワ市内の教会

勤め始めの頃、私の出身校である日本体育大学は、男子が全体の九割近くを占めていたので、女子大学に就職が決まり、雰囲気も全く違い、果たして毎日やっていけるかと言う不安も大きかった。それでも助手の人達が大変優しく親切で、良い仲間に恵まれ、とても楽しく勤務出来たことは有難く、感謝の気持ちで一杯である。

勤めて二年目のことである。短大文科の非常勤で来校していた東京教育大学（現筑波大学）の大石先生からのお話で、夏休み中の八月の一ヶ月間ソビエト連邦（現ロシア）にボウリングを指導しに行くことになった。ソ連の首都モスクワにあるゴーリキー公園内で「アトラクション71」と銘打った、世界中のレクリエーション機器・設備の展覧会が開催された。日本からはボウリング及び機材の紹介が行われた。日本はボウリングブームの真っ盛りで、プロボウラーが沢山いたが、ソ連は共産圏なので、プロは受け入れられず、大学の教員と言うことならば問題はないということであった。

この頃、短大文科が正課の授業でボウリングを行っていた。水道橋にある後楽園のボウリング場のワンフロアーを借り切って実施していた。私は文芸の授業の入っていない金曜・土曜の朝からお手伝いとしてこの授業に参加させて貰っていた。そういう縁で短大文科の女性の先生と私の二人が共立からは行くことになったのだ。

モスクワのホテルに一ヶ月間滞在し、白夜と言われる八月の気候の良い時期に、一日中テントの中に作られた四レーンを使い、招待状が送られた上層階級の人達に、ボールの持ち方から投げ方までを指導した。公園まではタクシーで向かうことが多かったが、モスクワ川を行きかう船を使うこともあり、短い夏を楽しむモスクワ市民の姿を見ることも出来た。

ミニスカートのユニフォーム姿で

昭和五十四年に八王子キャンパスに移転するまでは、助手の仕事とバレーボール部の顧問もしていた。八王子キャンパスで一、二年次が授業を受けることになる。初年は文芸学部と家政学部の一年次のみだったので、私が文芸学部の一年次の体育全クラスを担当した。授業は八王子キャンパスが中心になり、教授会、教務委員会等の会議は神田校舎で行われていたので、毎週火曜日は神田校舎へ通った。八王子キャンパスは校地も広くバスケットコートが二面取れる体育館、四百メートルの陸上競技場、ゴルフの打ちっ放しが十二打席ある練習場、コートが九面と壁打ちを有するテニスコートがあり、施設はとても充実していた。テニスは専門外だったので、私は技術を習得するためにテニススクールに通ったり、指導者講習会を受けに筑波大学に毎年行ったりしたものである。八王子キャンパスの最後の頃は、テニスが授業の中心になっていた。

現在の共通教育科目に当たるものが一般教養科目と言われていた時代だったので、担当の先生方は「八王子専任」と言われた。平成元年に現在の国際学部が創設された。そして十年余り前に三学部が八王子から神田に戻って来たのである。この頃八王子には、二十を超える大学が点在していたが、また数多くの大学が諸般の事情により都心に戻って来たのである。八王子専従だった先生方はどこかのコースに所属することになり、文芸メディアコースが出来た平成十三年から体育もメディアコースに加わった。

平成元年以前から学園は国際交流事業推進に力を注いでいた。中国に提携校が六校あった時代に中国教職員研修旅行が春休みに実施されていた。私は平成六年に実施された第二回目に参加させて頂いた。団長が藤木先生で、一緒に市川先生が参加した。同じ学園に勤務していながら殆ど交流のない先生方、事務職員の方々とも知り合う機会になったのも嬉しかった。北京では精華大学のゲストハウスに宿泊、バスで北京市内の観光をし、精華大学の工学系の講義も受けた。万里の長城を始め、故宮、天安門広場、古文化街等、沢山の名所を見学出来たのは、良き思い出となっている。

後半は西安に移動、西安交通大学が創立百周年の記念の年で、西安に着いた夜、西安交通大学の先生方との晩餐会が開かれた。西安は、初めて訪れたのにとても懐かしく感じられ、今考えても印象的であった。有名な兵馬俑にも見学に行ったが、戦争に向かう兵士の表情が、とても暗いものばかりとの説明を受けた。もの凄い数の兵士像が、大変大きな体育館のような建物の中に保存されてあった。

中国教職員研修旅行は数年間続いたと思うが、中国はまだまだ現在のような近代的な国になる前だったので、自転車に沢山の荷物を積んで運ぶ人の姿も多く、馬車道も健在であった。北京オリンピック開催を機に、高速道路の整備、道路の安全確保等、色々な面でかなり改良されたものと思われる。

神田・一ツ橋キャンパスに戻って一年目はまだ体育が必修であったが、二年目から選択科目になり、健康スポーツ実習・健康スポーツ演習と科目名も変更された。選択科目になっても履修する学生は多く、抽選をして履修者を決めている。スキー、スノーボード等のシーズンスポーツも今年度で三回を数える。二号館に体育室とトレーニング室も出来たので、学生の活用を大いに期待している。

万里の長城（市川先生と）

神田・一ツ橋キャンパスに戻ってからは、体育の授業だけではなく一年次の基礎ゼミ・文芸ゼミ、四年次の卒ゼミ及び卒論主査、そして二年次の専門科目のゼミも担当しているので、とても幅広く勉強させて貰ったと思っている。卒論指導はスポーツ関連とメディア以外のテーマもあり、主査として指導するのは結構大変であった。

共立女子大は「誠実、勤勉、友愛」をモットーとし、女子教育の高等教育機関として「女性の自立」を図ることを教育目標に百三十年の歴史を誇る学園である。建学の精神は、「女性の社会的地位向上のための自活の能力の習得」・「自立した女性として必要な教育の習得」である。このような環境の中で助手の時代は育てて貰い、学生を育てる立場になってからも数々の素晴らしい体験をさせて頂いたことは、私の一生の宝物となっている。文芸学部で共立人生を送れたことに心より深く感謝している。

今後の、共立女子大学文芸学部の発展を心の底から願って止まない。

（さかぐち　よしい　教授・運動生理学）

「地の果て（ランズ・エンド）」の、その彼方を見る時間。静かな海。

美の旅

村井　華代

人間の意志がつくりあげた美から離れていたいと思うことがある。イギリス、ランズ・エンド。聞こえるのは、岩に波が砕ける音と、風の音だけ。眼下は海なのに潮の匂いがなく、ハリエニシダの花の香りだけが漂う。死後の世界というものがあるとすれば、こんなところではないかと考えていた。

（むらい　はなよ　教授・西洋演劇論）

大学随想

十年先のための「よむ・かく・きく」

杉村　使乃

教員として働き続ける上でFD（Faculty Development：大学教員の教育能力を高めるための実践）の機会は貴重である。二〇一一年夏、イギリス、オックスフォードで開催された英語教員のためのティーチャー・トレーニングで印象に残っていることがある。「言語学習に人間性を」（Humanizing Language Teaching）という活動に携わっている講師の言葉である。FDという言葉が大学の一部として定着して久しいが、学習者中心の、学習者が一人の人間として生きる糧を得られるような授業づくりについては、私に関してはまだ道半ばである。その講師の言葉にあったのは、学習者の十年先にも役立つような教育を目指すということだった。

先のことを考えると果てしないが、「とりあえず自分の目の前にいる学生の少なくとも十年先について考えませんか？」という提案は極めて妥当だと思う。先日、以前関わった学生と会い、彼女が学費のために借りた奨学金を十年かけて返済するという話を聞いたばかりなのである。若い彼女がそんなにも長い間、返済に月日を費やすのかとめまいを覚えるほどであったが、一方、自分が受けた教育は苦労して返済するだけの価値があったと振り返ってほしいと背筋が伸びる思いであった。

この原稿を書いている二〇一七年一月、日本経済新聞元旦号第二部の特集は「IT未来いま──広げよう人の能力」。内容は人工知能（AI）やロボットを産業、雇用の創出にどう生かすかについて、さまざまな試みが紹介されている。ITやAIを人間から仕事を奪う脅威として遠ざけず、社会に組み込む視点が求められている。オックスフォード大学のAI研究者が数年前に発表した、近い将来、機械に取って代わられる職業リストは衝撃を与えた。年頭、話題になったユーザーの生活を理解し、使いやすく「成長」する家電への適用も含め、AIの適用範囲は身の回りで急速に増加している。

二十一世紀を生き抜くために、必要とされる人の能力とは何なのか。国立情報学研究所（共立のお隣ですね）教授、新井紀子氏の提言は文芸学部の私たちに、AI時代の教育を考える上で大きなヒントを与えてくれる。登場したのは、東大合格を目指すAI東ロボくん。彼（？）は計算や暗記は得意だが、文章を理解する能力はまだ極めて低いとのこと。AIが台頭する中、将来、社会で自分の役割を手にするためには、高い言語能力の習得は一つのカギになりそうだ。AIはパターン認識や統計的処理を得意とするが、「論理と言語を駆使して高度に思考し表現する仕事は苦手」（新井氏）とのこと。（二〇一六年三月三十日　日本経済新聞）

一方、同時に指摘されているのは、若い世代の読解力の低下であった。背景には過去二十年ほどの間に激変した生活環境がある。新聞や本が身の回りから消滅し、大人と会話する機会が激減している。上の世代には当たり前と思われていた言語能力を訓練する環境が、若い世代では奪われている可能性が高い。文芸学部の学びの特色は「よむ・かく・きく」。学生たちの卒業後も継続する成長のために深く「よむ・かく・きく」機会がまさに求められている。

（すぎむら　しの　教授・イギリス文化文学／英米児童文学）

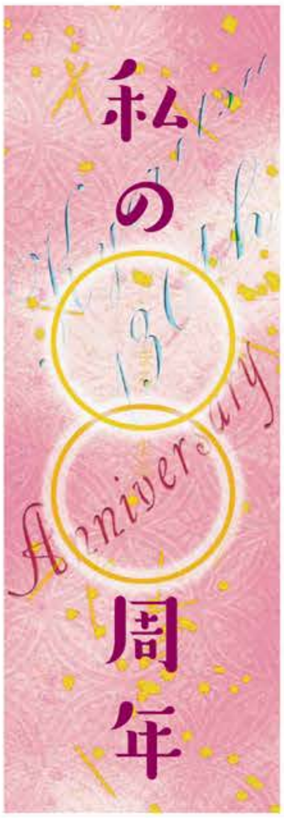
新入生の皆さんへ

文芸学部長　池上　公平

新入生の皆さん、文芸学部へようこそ。晴れて大学生となった皆さんはこれからの四年間に大きな希望を持っていることと思います。しかし、皆さんが日本の内外に目を向け、厳しい現実を前にした時、たじろがざるを得ないのではないかとも思います。

「世界は、あなたの前に、重くて冷たい扉をぴったりと閉めている。それを開けるには、じぶんの手で、爪に血をしたたらせて、こじあけるより仕方がないのである。大ぜいの先輩が、ながいあいだかかって、やっと、その重くて冷たい扉を、ほんのわずか、こじあけたところである。戦いは終わったのではない、はじまったばかりである。大ぜいの先輩は、後からくる君たちのために、全力をふりしぼった。いまも、ふりしぼっている。そしていま、君たちはその重い冷たい扉の前に立っているのだ。君たちは、どうするか。」

これは『暮らしの手帖』を創刊した花森安治（『とと姉ちゃん』で唐沢寿明が演じた花山伊佐次のモデルです）の「この春、学校を卒業する若い女のひとのために」という文章の一節です（『一銭五厘の旗』暮らしの手帖社、一九七一所収）。お祝いの言葉とは言いがたいかもしれませんが、このような世界で生きてゆかなければならない皆さんに知っておいてもらいたい言葉です。そのための力を、文芸学部での四年間で身につけ、より良い人生を生き、願わくば世界に平和をもたらす人になってほしいと切望します。



私のAPニュース25周年

中本　恭平

本稿は、私が担当する「資格英語B」の授業中になぜ英語のラジオニュースを流すのかという、履修生のみなさんの疑問に答えたものである。

大学生の頃、チャンポン先生という異名を持つ先生がいた。ご専門は英語史で、大母音推移とかウムラウトといった難しい専門用語が出てくる講義の中で、なぜかいつもAPニュースの話題に脱線するのであった。APニュースは、米軍の極東放送で毎正時に流れるアメリカAP通信社のラジオニュースである。チャンポン先生は、APニュースのディクテーション課題を毎週出した。これには閉口した。マシンガンのように英語が流れてくるので、ニュースのトピックはおろか、そもそもニュースとニュースの切れ目すらわからなかった。

チャンポン先生から巣立って数年後、イギリスの大学院に留学する機会を得た。職場体験を含む課程で、インターンの期間中は、気難しい初老婦人のアパートに間借りした。

ある夜、日本から持ち込んだ音楽カセットを聞いていると、「キヨ、そんなものを聞いていても英語が伸びないよ」と（英語で）忠告された。そのときはムッとしたが、この言葉は私の胸に深く突き刺さった。

帰国して成田に降り立つと、まわりから聞こえてくるのは日本語ばかりだった。これだとせっかくすこしは伸びた英語リスニング力が落ちてしまうと危機感を持った私は、他に聞くものがないからという消極的理由で、米軍放送から流れてくるAPニュースを聞くことにした。イギリス英語に慣れた耳にはアメリカ英語はかなりの違和感があり、顔をしかめながら聞いていた。

それから四半世紀。今ではアメリカ発音にもすっかり慣れ、むしろイギリス人特派員の英語に違和感を覚えるようになった。ニュースのトピックはだいたいわかるようになったし、ニュースとニュースの切れ目もほぼ問題なくわかるようになった。しかも、副産物として、アメリカ事情にずいぶん明るくなった。この間、大統領選挙は六回あったし、9・11もあった。ニューオーリンズを水没させたハリケーン「カトリーナ」が襲来したし、リーマンショックもあった。大リーグのポストシーズンのやり方も、アメリカではアメフトやバスケの人気が高い反面、サッカーの報道は世界大会やオリンピックを除けばまったくないということも、すべてAPニュースを通じて知った。

時計の長針が十を過ぎると、まるでパブロフの犬のように、そろそろラジオのスイッチを入れなきゃ、と自動的に反応する。だから、時計を見て長針が一のあたりにあると、「しまった、APを聞きそびれた」と軽い罪悪感にさいなまれたりする。ときどき、FMでモーツアルトの心地よい音楽を聞いている最中にAPニュースの時間になることもある。このまま音楽を聞いていようと思ったその瞬間、「そんなものを聞いていても英語が伸びないよ」という言葉が脳裏をかすめる。名曲の途中ですが、と自分に言い聞かせて、AM810にダイヤルを合わせる。

最後に、英語リスニング力を伸ばしたいと願う学生たちへ。まず、英語をBGMにしてはいけない。集中して耳を傾ける必要がある。次に、完璧主義は捨てよう。わからないところは外国語だからしかたがないとすっぱりあきらめる。わかったところを積み重ねていく足し算志向がよい。後は継続。足し算の効果は抜群であるという信念のもと、授業でAPニュースを流す。

（なかもと　きょうへい　教授・英語学）

afnpacific.net でも聞けます

私の33周年

山本　聡美

観音菩薩の縁数にちなんで、今から三三年前。私は中学生であった。

郷里の宮崎県で、当時女子が進学できる私立中学校は少なく、皆が迷うことなく地元の町立中学校に進んだ。ただし、男子は別で、隣県鹿児島の名門ラ・サール学園や、県内でも文武両道で評価の高かった日向学院（現在は共学）などのいわゆる有名私立へ進む道が開かれていた。もちろん、寮生活をも含む遠方の私立への進学は、成績だけでなく、それぞれの家庭の教育方針や何よりも経済状況が大きく関わる。実際、男子生徒であっても、地元を離れる者はまれであった。しかし、幼く愚かであった私は、それを「男の子だけずるい」の単純明快な論理に還元し、心から憤慨したのである。そして、ささやかな抵抗として「もう、この中学で何かを学ぶのはやめよう」という、ストライキ（？）を実行した。

登校拒否をするほどの根性はなく、とりあえず無遅刻無欠席で通学するのだが、授業という授業で一切の耳と心を閉ざして、ひたすら三年間をやり過ごした。一体何のために…。

反抗期に問答は無用というものの、我ながら馬鹿なことをしたものである。そのせいで、私には義務教育の最後の三年分の何かが、もろともに欠落している。世界の地理、歴史の大切な年号、英文法の基礎、そして周囲の人や物事との本質的な協調性…。

実感を伴って言うことができるが、ある事柄を学ぶべき「適切な時期」というのが、確かにある。その時期に学び損ねてしまったものを、後から取り戻す機会は残念だが永遠にない。後づけで必要に迫られて慌てて獲得した知識はどこか表層的で、頼りない。その後の人生で、いろいろな縁に導かれて、現在の私は「研究」を生業にしているが、その根底のところにぽっかりと三年分の空白が横たわっていることに、いつも後ろめたい思いを抱いてきた。

画・麻薙真里子

ところが、そうして三三年がたった二〇一六年の秋、ちょっとした奇蹟が起こった。

母校である郷里の中学校から、卒業生としての講演依頼を承り、卒業後初めて校門をくぐった。とても複雑な思いでそこに至った私を、校長先生以下現役の先生たち、地元の教育委員会に勤務する同級生たちが笑顔で迎えてくれ、講堂代わりの体育館では、懐かしい制服を着た中学生が待っていてくれた。

同じ場所で、かつて一切に反抗的だった私が講演なんて冗談みたい、笑っちゃうと思いながら教壇の上から眺める中学生の姿は、一様に幼く、本当にまだ子供で、いろんな可能性、可塑性、可変性、そんな形容がぴったりの、植物なら芽、昆虫なら幼虫や蛹みたいだった。

ああ、中学生の自分はこんなに小さな蛹だったのか、と三三年ごしのわだかまりが解けていくような既視感。

きっとこの中にもあの時の自分がいて、急にやってきた卒業生という大人の言葉に耳を閉ざし心を閉ざしていることだろう。大いに閉ざせば良い。がちがちに固まった殻の内部で、溶解する幼い自我と向き合いながら、成長するための時間と栄養をたっぷり確保すると良い。この小さな町では、大人たちの社会がそれを見守っていてくれる。

瑞々しく群集する蛹たちのいる場所に、三三年前に脱ぎ損ねた私の古びたぬけ殻をそっと置いて、その校門を後にした。

（やまもと　さとみ　教授・日本中世絵画史）

卒業生—きのう・今日・あした—

懐かしき青春時代

永田　迪子（旧姓　小谷）

文芸学部六期生です。気がついたら七〇歳を過ぎ、大学時代を振りかえると、走馬灯のように思い出します。病弱で体が小さく、めそめそ泣いている女の子で、親は将来を案じたようですが、成長と共に元気になり高校で進学組に入り、大学を夢みてこつこつ勉強しました。優秀とも言いがたい、か弱い娘を鳥取県の田舎から東京の大学へ進学させるのは大英断だったでしょう。父が高校の進学指導担当の教師だったこと、母の姉、伯母夫婦といとこ四人が東京の渋谷に住んでいたので、不安はあったものの、私を押しだしてくれました。

共立を選んだのは、神田の古本屋街にあることと、鳩山薫子学長に憧れたことです。その頃大宅壮一著『女傑とその周辺』で鳩山先生を知ったのです。東京の生活は私が夢に描いた以上に、充実したエキサイティングなものでした。おとなしい殻を破り、積極的な女子学生に変身しました。最初は短大に入り、良い友達に恵まれ、今でも十人位の親友がいます。文芸学部に編入すると、当時英文学界で第一人者の福原麟太郎先生、冨原芳彰先生、成田成寿先生など超有名な先生の講義を受けることができたのです。又月一回、共立講堂で全学集会があり鳩山学長のご挨拶、鳩山さんに頼まれると断れなくてと、当時の東大総長茅誠司氏や作家幸田文氏の講演、シャンソン歌手芦野宏の独唱等々こんなに贅沢な女子大学があるだろうかと思いました。ただ文芸校舎は木造校舎、下宿は古い三畳の部屋でした。

自費出版『蓮のよろこび—蓮をたずねて—』を手に

一九六〇年代は安保闘争、歌声喫茶、ビートルズ、ハワイアン等の全盛時代です。又、三越、伊勢丹百貨店、国立博物館、新宿御苑、昭和三三年東京タワー完成等すべてが驚きでよく眼を回さなかったと思います。翌年皇太子（今上天皇）がご成婚されました。東京五輪は卒業して結婚、第一子を出産した年なので古い東京を経験したことになります。

卒業後、同郷の永田と結婚し、京都に移り住みました。京大の助手だった主人の仕事の資料あつめ、校正など手伝いながら、男女一人ずつ育てました。子供の教育には反省、後悔が多々ありますが、孫が四人でき上出来です。

夫の定年退職後、年寄りの介護の為故郷に帰り一五年たちます。京都で出会った蓮の花に魅せられて同好会に入り、諸先輩にしごかれながら研究会誌に投稿したものをまとめ、このたび『蓮のよろこび—蓮をたずねて—』を自費出版しました。蓮の研究の小論文と蓮をたずねて、アメリカ、中国、韓国などの紀行文集で、還暦過ぎてからの集大成です。実はもう一冊『蓮の玉手箱』として、同好会のブログに投稿した蓮のあれこれをまとめたいです。

（ながた　みちこ　昭和三七年度　文芸学部　英文コース卒業）

さくら賞

文芸学部の優秀な卒業論文・卒業制作に与えられるさくら賞。平成二十八年度は、次の論文に贈られました。

山川瑞貴（文芸教養コース）「虚構と現の狭間—80年代松田聖子の研究—」

研究紹介

上野　慎也
池田嘉郎／上野慎也／村上衛／森本一夫編『名著で読む世界史120』山川出版社　二〇一六年一二月

滝沢　明子
「「作家」という幻想　ジッドに憧れたロラン・バルト」『仏語仏文学研究』第四九号　東京大学仏語仏文学研究会　二〇一六年一〇月

田口　亜紀
フィリップ・ジョルダン『100語でたのしむオペラ』武藤剛史、田口亜紀訳　白水社　文庫クセジュ　二〇一六年六月

福田　收
『情報基礎と情報処理（第四版）—Windows10&Office 2016対応—』共著　㈱オーム社　二〇一六年一二月

藤田　岳久
『図書館情報資源概論』（ベーシック司書講座・図書館の基礎と展望　八）共著　学文社　二〇一六年一〇月

堀　新
「「ねね」から太閤伝記を考える～歴史学と文学の共同作業のために～」『リポート笠間』六一号　笠間書院　二〇一七年一月

武藤　剛史
翻訳：ミシェル・ロクベール著『異端カタリ派の歴史』講談社選書メチエ　二〇一六年一一月

吉澤　弥生
対談　藤井光×吉澤弥生「芸術生産の現場から考える—労働・キャリア・マネジメント」『社会の芸術／芸術という社会』フィルムアート社　二〇一六年一二月

「周年」記念

岡田　ひろみ

「周年」とは「①まる一年。一周年。また、一周忌。副詞的に用いて、一年中の意にもいう。②数を表す語について、その物事が始まってから、その数だけの年を経過したことを表す語」(『日本国語大辞典』小学館)のことである。元来、慶事・弔事のどちらにも用いられる。とはいえ、「父が亡くなって二〇周年だね」「今年はあの事故から一〇周年を迎えます」とはほとんどいわないから、現代のニュアンスとしては慶事に用いられることが多い言葉だといえる。そして周年で語るときには「一」「五」「十」のようなきりの良い数字で表すことが多い。

このテーマで依頼があった際、二つ返事で引き受けたけれど、私個人がかかわることで、「〇〇周年」のような出来事があるかどうかははなはだ不安だった。共立(東京)にきて一四年目(一三周年)、今の家に住んで八年目(七周年)、犬を飼って四年目(三周年)、猫を飼って二年目(一周年)……。いやいや、たとえきりがよくてもどれもここで語ることではない。そもそも、「周年」という語で表現するのは、個人ではなく、他に開かれた何かであろう。「周年」という言葉を用いることで、発信先にそれだけ年数が経過したことを、その歴史を喧伝するのだから。個人の小さい出来事などはどうでもよいのだ。思えば、この数ヶ月で最もよく目にした〇〇周年は、共立女子大学創立一三〇周年をのぞけば、SMAP結成25周年だろうか。

2016年12月30日朝日新聞朝刊より

私は彼らのファンというわけではないが、25周年を祝うこともなく解散してしまったことを、少なからず複雑な気持ちで眺めていたその他大勢の一人だ。学生時代、初めて家庭教師を担当した中学二年生の少女がSMAP好きで、そういうアイドルがいることを知ったのが、二三年前である。月9ドラマやバラエティで彼らの顔をよく見るようになり、六人の区別がつくようになったのはそれから数年後だろうか。アイドル歌手にはふさわしくないように思われた「笑い」の世界にチャレンジする様子は、はじめ痛々しくも思えたが、「スマスマ」の「古畑任三郎」シリーズ等、名コントを開拓していった。そもそもあまりテレビを見ないので、ここ十数年、たとえば「スマスマ」で彼らが料理以外にどのようなコーナーを設けていたかなど、まったく知らないのだけれど、番組がずっと続いていたということは少なくとも「それなりの」存在意義を保ち続けていたのだと思う。実は「スマスマ」の最終回を録画し、少しずつ見ている。「少しずつ」であるのは、想像以上に当時の記憶と重なり胸がつまるからである。実は25周年アルバムも買おうと思っている。けれど、まだ買っていないのは、聴くとつらくなるような気がするからである。こういう感情を「感傷」というのだろう。五人のうちで誰がお気に入りというのもない。彼らの曲でどれが好き、というのがあるわけでもない。にもかかわらず、彼らの解散にこれほど突き動かされるというのは自分でもよくわからないが、あえて意味づければ、彼らの存在が「日常」にあって当然のものだったのだろう。そしてそれが24とか27とかではなく、「25周年」という「周年」の年だったこともあるのではないか。「周年」の祝いは、その「出来事」の歴史を辿りつつ祝われる。彼らの「25周年」で、予想外にも私の二十五年を振り返ることになってしまった。

(おかだ　ひろみ　教授・日本文学)

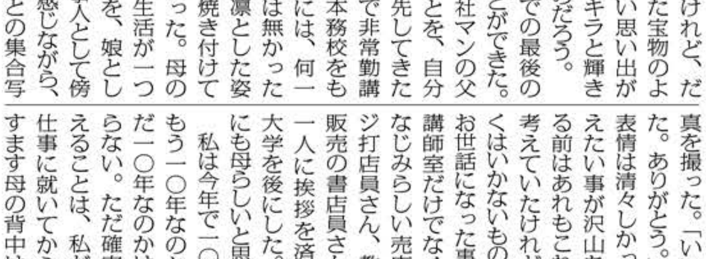
私の10周年

大島　十二愛

二〇一七年、共立に来て一〇年目の春を迎えようとしている。私が大学教員になりたいと思ったきっかけは母だった。小学生の頃、家にはよく母の教え子らが遊びにきており、当時はとても大人にみえた大学生のお兄さんお姉さんたちが、一緒にバドミントンやゲームをして遊んでくれたものだった。私にとって、そうした環境はとても身近で、どこか心地よかったことを憶えている。中学、高校、浪人生活を経て大学、大学院と進学をして、その時々、時間があるとたまに母の授業に潜り込んだりした。普段家でみている母の姿とは少し違う様子が、娘としてはどことなく気恥しくもあったが、小柄な背丈から発せられる後ろまでよく通る声、綺麗な発音と板書、授業前後の学生たちとの楽しそうなコミュニケーション、身内ながら素直にすごいなぁと感心させられることもしばしばだった。そんな私も二〇〇八年、分野こそ違うものの、母と同じ仕事をスタートすることになったのである。

初めて担当した卒ゼミ学生の中に、なかなか就職の決まらない学生がいた。夏休みも過ぎ、卒論提出時期も過ぎ、卒業式も過ぎてしまった。年度が変わり新学期が始まっても、音信は無くずっと気に掛けていた。そんなある日の夕方、いつものように授業を終え、教卓で荷物を整理していると、教室の後方からどこか見覚えのある顔が歩いてくる。「先生!」私は咄嗟の出来事に「えっ?」とただ驚くばかりで、何が起こっているのかまったく状況が飲み込めずにいた。彼女は笑顔で「おかげさまで去年の大晦日に内定もらいました!いま社会人として働いています。先生にはずっと心配をかけていたので直接報告にきたいと思って。初任給が出たから親と先生にプレゼント買ったよ。」と言って、リボンのついた袋を手渡してくれたのである。その瞬間、私は胸が一杯になり、涙が止まらなくなった。それを見た彼女も涙目だった。仕事をし、生活をするには辛いことも多い。けれど、だからこそ、こうした宝物のようなかけがえのない思い出がよりいっそうキラキラと輝きを増して心に残るのだろう。

昨年、母の母校での最後の授業に立ち会うことができた。転勤の多かった商社マンの父の仕事と家族のことを、自分のことより常に優先してきた母は、複数の大学で非常勤講師を永く勤めた。本務校をもたない非常勤の母には、何一つ盛大な最終講義は無かったけれど、私はその凛とした姿をしっかりと目に焼き付けておきたいと強く思った。母の三五年以上の教員生活が一つの節目を迎える時を、娘として、同じ業種の仕事人として傍にいられる幸運を感じながら、授業後、母と学生との集合写真を撮った。「いい記念になった。ありがとう。」と言う母の表情は清々しかった。「まだ伝えたい事が沢山あって、始まる前はあれもこれも言おうと考えていたけれど、結局うまくはいかないものね」。その後、お世話になった事務室、講師室だけでなく、顔なじみらしい売店のレジ打店員さん、教科書販売の書店員さん一人一人に挨拶を済ませ、大学を後にした。いかにも母らしいと思った。


母校にて最後の講義を終えた母
(2016年1月　筆者撮影)

私は今年で一〇周年。もう一〇年なのか、まだ一〇年なのかは分からない。ただ確実に言えることは、私がこの仕事に就いてから、ますます母の背中は大きくなるばかりだということ、そしてこの仕事がやっぱり好きということだ。私は私のやり方で、これから先も、学生が迷ったり落ち込んだりしている時、わずかでも寄り添い、大丈夫と背中をポンと押してあげられる存在でありたいと思う。

(おおしま　そにあ　准教授・メディア史/歴史社会学)

研究ノート

プルーストの〈私〉

武藤　剛史

マルセル・プルーストは、サント=ブーヴ論のなかで、「一冊の書物は、私たちがふだんの習慣、交際、さまざまな癖などに現している自己とはまったく異なる、もうひとつの自己の所産なのだ」と言い、さらに「この深い自己は、私たちが他人といっしょにいるあいだはじっと待機している自己であり、これこそ唯一現実的なものと感じられる自己であるが、芸術家たちは、ある神に帰依してしだいに離れがたくなり、やがてもっぱらその神の栄光を讃えるために一生を捧げ尽くしてしまう、まさにそのようにして、ついにはこの自己のためだけに生きることになる」と言っている。

この自己は、たとえば無意志的記憶の現象とともに蘇る。「じつはそのとき、私の内部でこの印象を味わっていた存在は〔…〕その印象の超時間的部分において、その印象を味わっていたのである。〔…〕この瞬間、私がそうであった存在とは超時間的な存在であり、したがって未来のはかなさなど少しも意に介さない存在なのである。〔…〕時間の秩序から抜け出した一瞬間が、その瞬間を感じるべく、私たちのうちに時間の秩序から抜け出した人間をふたたび生み出したのだ」。

こうした自己、私たち自身さえほとんどまったく意識することのない秘められた自己こそ、私たちの真の自己、真の〈私〉であり、しかもこの自己、この〈私〉はつねに超時間的世界を生きており、みずからも超時間的存在であるというのがプルーストの深い確信であった。『失われた時を求めて』というあの巨大な小説は、まさにそうした確信に基づいて書かれた作品なのである。

言うまでもなく、そうしたプルーストの確信は、私たちの常識とはまったく相いれない。人間は時間的世界を生きており、人間自身も時間的存在だというのが、私たち現代人の共通認識である。そのため、プルースト研究者ですら、この確信を単なる比喩的ないしは修辞的言辞、あるいはひとつのイデオロギーと見なすのがせいぜいのところで、たいていの場合、この確信をまったく無視してしまう。

しかし、プルースト研究に求められているのは、何よりもまず、彼の確信を誠実に受け止め、その真実性をどこまでも突きつめていくことであり、逆に言えば、人間は時間的世界を生きており、人間自身も時間的存在であるという私たちの常識を根底から疑い、批判的に吟味することではなかろうか。少なくとも私は、そうした信念のもとに、これまでプルーストを研究してきたつもりである。

そのようにプルーストを研究していく過程で、私はエックハルトや道元のような宗教者、ハイデガー、ヴィトゲンシュタイン、ミシェル・アンリ、そして西田幾多郎などの哲学者に出会った。あるいはトルストイ。彼は『要約福音書』のなかで「真の生は時間を超越している。それはつねに現在のうちにある」と言い、さらに「生の欺きは時間にある。過去と未来の生は、現在の生を隠蔽する」と言っている。それを受けて、ヴィトゲンシュタインもまた「現在のうちに生きる者は永遠に生きる」、「時間に生きるのではなく、現在のうちに生きる者のみが幸福である」と言う。彼らの主張はそのままプルーストの確信に重なり、私たちに人間観の根本的転換を迫っている。

『プルースト 瞬間と永遠』
筆者著 1994年

(むとう　たけし　教授・フランス文学)

心象点描

ガクッ!問のすすめ

國分　建志

中国の老荘思想に「無用の用」という言葉がある。「器は中が空だからこそ、そこに物を入れて使うことができる」という、「無」それ自体に意味を見いだし「無」をたっとぶ考え方である。私がこれから書こうと思うのは、この「無」にまつわるごく個人的な「無用の」体験談である。

もう何年も前の話になるが、学生たちと焼き肉屋に行ったことがある。その夜はとても盛り上がり、私もお調子に乗ってさんざん飲み食いした。いまだに悔いが残るが、その日の私はうっかりしていたのである、自分の胃腸が弱いことを…。

はたして、みなで帰りの地下鉄に乗るや胃がもたれだし、気分も悪くなってきた。私は常に持ち歩いているチュアブルタイプの胃腸薬をあわてて口に含んだ。うまいようなまずいような甘苦い味が舌の上にじんわりと広がってくる。車窓にはトンネルの真っ暗な壁面をバックに吊革をつかんで立つ自分の姿が映っている。私はそれを徐々に高まる不快感に耐えながらぼんやりと眺めていた…。

無「葉」の用
(神保町交差点にて)

ふと気づくと、目の前に白っぽい円柱状の物が林立している。これはいったい何だろう?一瞬、頭をよぎったのはギリシャ神殿だった。が、よく目を凝らすと、それは柱ではなく、男女さまざまな人のすねだった。同時に尻や太ももに固くひんやりとした感覚が伝わってきた。あれ?私は下に座っている?ざわついた声が聞こえてきた。顔を上げると、学生たちが驚愕の表情で私を見下ろしている。立ち上がってみなの話を聞くと、私が突然床に崩れ落ちたという。そう、私は気を失って床にへたり込んだのである。

無事に生還したから言えることではあるが、人生初の失神は、ある意味非常に新鮮な体験だった。何が起きたのかを理解して真っ先に思ったのは(哲学者でもないのに偉そうだが)「あぁ、これが『無』か!」ということである。なにしろ私には意識をなくしたという意識がまったくないのである。失神前後に目に見えた「車窓に映る自分の姿」と「円柱(のような人のすね)」は、記憶の中ではなめらかにつながり、その間に時間的な断絶はまったくない。あたかも映画フィルムの一部をカットしてその前後をつないだようなもので、カットされた部分は私の人生からすっぽりと抜け落ちてしまっている。ただ前後二つの光景があまりにも違うため、その間に何かがあったらしいことがかすかにうかがえる程度なのである。

もしこの世に本当の「無」があるならば、それは何もない空間でもなければ真っ暗闇でも静寂でもなく、何もないことすら感知できないようなものなのではないだろうか。真の「無」を知りたい方にはぜひ一度失神することをオススメしたい…などというのは冗談だが、この体験をしてから、自分の周囲にあるさまざまな物の存在がこれまでよりもありありと感じられるようになった気はする。これは失神体験の影響かもしれない。

ところで当時の学生たちとはその後もたまに会う機会があるが、そのたびにこの「失神事件」をネタにされる。人前で恥ずかしい姿をさらした事実はどうあがいてもなかったことにはならない。

(こくぶ　けんじ　教授・中国語学)

異動・消息

◇昇任
田口亜紀教授(准教授)
谷田貝雅典教授(准教授)
杉村使乃教授(准教授)

◇退職
〈教授〉内田保廣、Janick Magne、水谷靖
〈助手〉生田茉里絵、市地英、及部美希、片山慧子

◇新任
〈准教授〉原田敦史
〈専任講師〉渡部直
〈助手〉井野元朱里、川﨑優衣、永嶋千春

コースの窓

〈英語英米文学〉
英語で親しむ

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。秋には、二年生からの所属コースを決めなければなりません。コース選択の自由を実り豊かなものにするために、何を深く学びたいのか常に意識しながら過ごしてください。

二年生の皆さん、英語英米文学コースにようこそ！英語が得意な人も、苦手意識を克服したい人も、文学や芸術やメディアに英語で親しむことを心がけ、好奇心の世界を広げてください。

コースの学びを経験した三年生の皆さん、卒論のテーマを決める準備はできていますか？この一年で、じっくりと自分自身の問題意識を育んでください。

四年生の皆さん、大学生活も残り一年です。就職活動と卒論執筆の両方に悔いなく取り組めるよう、助手や教員に気軽に相談してください。

この三月で片山慧子助手が退職し、新たな道を歩み始めています。浦野郁准教授は、一年間の育休に入りました。皆さん、何度でも研究室に足を運んで、英文コースに慣れ親しんでくださいね！（沼田）

〈造形芸術〉
欲張る春

昨年度、一月十七日（火）～二十日（金）に水谷靖先生の退職記念展覧会と最終講義［十八日（水）］が行われました。多くの皆さまにご来場頂き、おかげ様で水谷先生のご退職に花を添えることが出来ましたことを改めて御礼申し上げます。四月からは、後任として彫刻担当に渡部直先生をお迎えし、造形芸術コース一同、新たな気持ちでスタートいたします。

さて、学生の皆さん、新学期の準備は出来ていますか？

私は、桜が咲き、暖かくなってくると、色々なことに挑戦したいという意欲が湧いてきて、ついつい欲張りになってしまいます。新学期、新生活という言葉も幸福感があって好きです。そんなこともあって、私の場合、一年の計は春にあります。お仕事を頑張ること、論文を二本以上書くこと、良い作品に沢山出会えるよう積極的に各地へ出向くこと、海外旅行にも行きたいし、英会話の上達も図りたい！四季のイベントも楽しみたいなあ。まずは千鳥ケ淵へお花見かな？

皆さんも沢山欲張って大学生活を満喫してくださいね。（菊地）

〈劇芸術〉
人材養成目的

どの大学にも「建学の精神」とか「教育の理念」といったものがあります。そんな中で、わが共立女子大学はホームページ上に「人材養成目的」という言葉を掲げている数少ない大学のひとつです。

「人材養成目的」とは、あまり聞いたことのない言葉ですね。いったいどんな意味でしょうか。人材を養成する目的ならば、「社会に貢献すること」といったところですが、少し違うようです。ぜひ一度、大学の、そして文芸学部の「人材養成目的」を読んでみてください。

ところで、劇芸術を学ぶ人に我々研究室スタッフが期待することは何でしょうか。難しいことは言いません。「芝居を見ること」「芝居を愛すること」「芝居を深く味わうこと」。それで十分です。後はすべて芝居が教えてくれます。「芝居なんて絵空事」ではありません。芝居より価値のある現実が、あなたの周りにはありますか？ それを発見できたら、それこそ芝居のおかげです。

そんな風にして私達も文学や芸術を通じて、様々なことを学んできたのです。（国）

〈日本語日本文学〉
コピー機ではない

三十七年間、日本語日本文学コースを導いてくださった内田保廣先生が、三月をもって御退職になりました。また、コースを支えてくださった市地英助手も、三月で御退職になりました。そして四月より、原田敦史先生が御着任なさいました。ご専門は、中世文学の軍記物語です。

さて、話は変わりますが、日本語日本文学研究室にはドアの近くに一台、大きな機械があります。授業資料やレジュメを印刷するために使用したことがある方も多いと思いますが、この機械、コピー機と違って少部数の印刷に不向きであったり、図やイラストの読み取りが苦手であったり、黒い部分（スミ）が多いと用紙を詰まらせて故障してしまったりと、少し気難しいところがあります。名前は、輪転機（りんてんき）といいます。

使い慣れてしまえば非常に便利な機械ですが、恐らく皆さんの使用頻度は年に数回。なかなか慣れることが出来ず、そのまま卒業というケースも少なくはないでしょう。現に私もそうでした。

輪転機を使用する際に、少しでも不安がある場合には、助手にお声掛けください。色々と便利な設定があったりもするのです、実は。（齋藤）

〈フランス語フランス文学〉
モン・パリ九〇周年

この四月よりフランス語フランス文学コースでは新たに二年生二八名を迎え、賑やかなスタートを切りました。コースでは、欧州、アフリカ、カナダ等、フランス語圏の様々な地域について学ぶことができます。とはいえ、フランスといえばパリという方も多数。昔から、パリは私たちの憧れの地です。

今からちょうど九〇年前の一九二七年、日本初のレビュー『吾が巴里よ〈モン・パリ〉』が宝塚少女歌劇団によって上演されました。海外視察帰りの岸田辰彌（岸田劉生の弟）の作品で、今や宝塚歌劇の代名詞である「ラインダンス」「大階段」が初登場しました。現在も歌い継がれる「うるわしの思い出　モン巴里　吾が巴里」という主題歌には、岸田自身の「一年余諸国を旅したが、忘れがたいのはパリの都だ」という想いが込められています。

二〇一七年には、この『モン・パリ』誕生九〇周年を記念して、レヴューロマン『カルーセル輪舞曲（ロンド）』が上演されます。パリの魅力を再発見する、素敵な機会になりそうです。（滝沢）

〈文芸メディア〉
アニメ聖地へGO！

ウチにこもりきりになりがちな若者がなんとかGOというゲームのせいで屋外にくり出し始めたらしい。ならばついでに、この千代田区周辺をアニメ聖地探訪のために巡ってほしい。「アニメ聖地」とは、アニメの舞台として描かれた実際の街並みや建物のことだ。心の拠り所として「巡礼」するファンが増えているのだとか。巡礼とまでいかなくても探訪だけで結構楽しい。アニメの舞台が見慣れた街並みのそこここに隠れている。

文メコースには、アニメを鑑賞し批評することに加えて、アニメーションを作成したり音楽を作ったりするクラスで学ぶ学生が多い。その人たちにお誘いしたい。アニメというフィクションにリアルな都市のあり様をしのびこませファンの心を揺さぶる仕掛けの一端を見に行ってみよう、と。できれば、メイロウィッツの『場所感の喪失〈上〉電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』なども合わせて読んでみて欲しい。カラダを使って得られた経験知を、読むという営為に結びつけて欲しい。難解な筈の文章がなぜか理解できるかもしれないから。（北村）

〈文芸教養〉
めざせV字型

「文芸教養コース？ それって何を勉強するところ？」これまでもこれからも、こういう質問を受けることでしょう。そもそも「文芸」学部じたいが、「文学部と何が違うの？」と質問されるはずです。そのなかの「教養」コースですから、周囲の人たちが「？？？」となるのは、ある意味、当然かも知れません。

多様な専門分野の教員が所属するコースですから、授業では幅広いテーマが取り上げられます。また、テーマへのアプローチも、授業によって、担当教員によって様々です。「答えは一つ」という受験勉強の常識にどっぷり浸かった頭脳に活を入れて、一日も早く大学生モードの頭脳に切り替えましょう。

文芸教養コースでの学びは、幅広いだけの、いわゆる「広く浅い」ものではありません。学問的な興味は広く、そして卒業論文では一つのテーマを深く掘り下げる「広く深い」学び（これをV字型と呼んでいます）がみなさんを待っています。

そしてみなさんが「文芸教養コースで良かった」「文芸学部で良かった」と思って卒業できるよう、教員・助手一同、そのための協力は惜しみませんよ。（堀）

プロフィール
土田（つちだ）　牧子（まきこ）　先生（専任講師）

「場所がわからなくって〜」と笑顔で部屋に入っていらっしゃったのは、昨年度より劇芸術研究室に着任なさった土田牧子先生。ご出身は東京だが現在は浜松在住のため、授業のある日に遠路はるばる通っていらっしゃるのだ。

東京藝術大学大学院では楽理科を専攻。「音楽大学で唯一、演奏を専門としない学科。音楽史や理論、音楽民族学という人類学とか民族学のような学問などありとあらゆる音楽に関わる学問を学ぶ学科にいました」。いつ頃、興味を持たれたか伺ってみると「小さい頃からピアノを習っていて中学・高校はミッション系の学校だったので、礼拝のときに何人かでローテーションでピアノを弾く係をしていたのですが、中学の担任が「音楽に進まないの？」と強く勧めてくれて、そうなのかなって思い始めました。ピアノの先生に母から聞いた楽理科の話をしたら「じゃあ、それでいこう」ってなってもう引き返せなくなって…。自分で興味を持ったというより周りに仕向けられたところが大きかった」。音大を受験しようと覚悟を決めたきっかけは、高校二年生のときにウィーン国立劇場が来日しそれをテレビで見てオペラに心ひかれたこと。「こういうのを研究してみるのも良いかなぁと思ったあたりから本気で受験勉強をしました」。でも実際入学し、卒論を考える時期になると「オペラもミュージカルも好きだったけど、子どもの頃から見ていた歌舞伎への未練が捨てられなくて、すごく迷ったけど卒論は歌舞伎音楽にしたんです」。

大学院時代、二年間アジア・アフリカ研究の拠点があるロンドン大学に留学していた。「日本研究でも有名なところで、アメリカ人で近松研究をしている先生の下で、日本とは違った学問大系の中で歌舞伎を学びました」。ロンドン時代にはオペラやミュージカル、バレエをかなり見ていたそうで、「グローブ座のスタンディング席が確か千円以下で『レ・ミゼラブル』も一番安い席で八百円くらい。授業が終わったらどっかの劇場！とまではいかないけど、結構行ってましたね」。と演劇三昧の日々を過ごした。

笑顔を絶やさず丁寧に話してくださる先生の小さい頃のお話を伺うと「引っ込み思案というか、積極的じゃない子どもだった。わりとのんびりしてたタイプ」というお話の後に「職業とかあまりわかっていない幼児の頃は体操選手になりたいとか言ってた」と驚きの事実が。体操は小学生の頃に習い始め、中学・高校は体操部だった。そんな先生のリラックス方法は温泉に行くことだそうだが、時間がなく、なかなか行けないそうだ。

先生のご専門は近代の歌舞伎音楽研究だが、専門の専門は黒御簾音楽という、舞台の袖で演奏している効果音楽である。黒御簾の中で歌う人・三味線を弾く人・鳴物という太鼓をたたく人と笛を吹く人がいて舞台に合わせて舞台を見ながら演奏するもので、レパートリーが決まっていて、その中から場面場面に合った曲を弾く。

最後に、学生へのメッセージをお願いした。「あっという間に四年間終わっちゃうと思うので、勉強でも、部活でも、まぁアルバイトでも良いので何か胸を張って自分はこれを頑張ったって言えるものがあると良いんじゃないかと思いますね」。（岩永）

▽本学部では、基礎ゼミナール、文芸ゼミナール、日本演劇史Ⅰ、劇芸術概論B、劇芸術演習ⅡA、卒業論文ゼミナール、演劇学文献研究Aをご担当。

掲示板

〈司書課程〉
現場の変化を見よう

大手書店員が著した本を読む機会がありました。出版不況の昨今、書店は様々な工夫をして客を飽きさせない努力をしている、それに比べ図書館の書棚には面白みがない、とのことです。私はこれを読んで少々違和感を覚えました。

図書館も書店同様、利用者に魅力的な場所だと思ってもらえるようにと変わり始めています。その一例はカウンター近くなどでの特別展示でしょう。書店同様、ポップなども添えて、利用者の目につきやすくしています。また、例えば「鉄道」についての資料と「鉄道を題材とした小説」は別々の場所に配架されてしまいますが、これらを一ヶ所に配架するという工夫をしている図書館もあるそうです。そもそも、レファレンスサービスは「思いもかけない資料との出会い」のきっかけになります。

こういうことを授業でもお話ししたいのですが、基本的な技術や知識をお伝えするだけで時間いっぱいです。ぜひ皆さん、現場に行って「見（魅）せかたの工夫」を観察してください。（藤田）

〈教職課程〉
指導要領改訂に思う

次期学習指導要領は「ゆとり」か「詰め込み」かの二項対立を乗り越え、「生きる力」の理念の具体化と教育課程の課題として、「何を学ぶか」から「何ができるか」への転換を目指すものであるとされる。

指導要領は、告示として公示されるがゆえに準法律として法的拘束力を有し、違反者は処罰される、良くも悪くも学校と専門職者たるべき教師を縛る文書である。要領本体に規定されなくとも、解説編等に、指導の視点や学習方法、活動例が細かく盛り込まれるなら、それは事実上の縛りとなる。

予測困難な時代を生きる力を育もうとする教育が画一的であってよかろうはずはない。そこでは専門職としての教師の自律性（自ら考え、判断・行動し、その結果に直接責任をもつ）に基づく自由裁量がたっぷり保障されなければならない。二〇一七年三月を目処に準備される次期学習指導要領がこの期待に沿うものであってくれればと願うばかりである。ロボット教師の対極となる教師の養成のために。（葉椰子）

〜ひと言ふた言〜
やる気スイッチ

数年前に、「どこにあるんだろう、君だけのやる気スイッチ」という、歌詞が妙に耳に残るコマーシャルがあって、そんなものがあれば苦労しないわ、と思った記憶がありましたが、どうやら本当にあるようです。

或る脳科学者の随筆に、脳の中心部、左右に側坐核という小さな部位があり、それが反応するとドーパミンとかいう神経伝達物質が分泌され、やる気が出るのだとありました。

では、どうすれば側坐核は反応するのか。行動によってしか反応しないんだそうです。やる気がないから行動しないのに、行動しないとやる気がでないというのでは、悪い冗談かと思いました。

しかし、諦めるのは早いようです。出来るだけ行動のハードルを下げればよく、どんな行動でも、行動しさえすれば、側坐核は反応し始めるとのこと。

なるほど。まぁ、生きるコツとは案外こうした他愛のないところにあるのかもしれませんね。時は春。仕切り直すのにちょうどいい季節です。冬の重い外套を脱いで、さぁ、行動してみましょう。（村上）

大学院文芸学研究科情報

まだまだ学び足りない、と思うことはありませんか。一度でも思ったことがある人は、是非、文芸学研究科の受験を視野にいれてみてください。文芸学研究科には日本文学領域、英文学領域、演劇学領域、文芸学領域の四つの領域があり、それぞれの関心に応じてより深く学ぶことができます。就職してお金をためてからという人は、社会人入試もあります。（岡田）